

定本
橫光利一全集

定本
横光利一全集
第十四卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集

第十四卷

昭和五十七年十二月十日 初版印刷
昭和五十七年十二月十五日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 保昌正夫

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二―三―一二

電話 四〇四―一二〇一 (營業)

四〇四―八六一一 (編集)

振替口座 (東京) 〇一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

©一九八二

目次

大正九年〜大正十二年

(一九二〇〜一九二三)

印象	3
時代は放蕩する	8
新らしき三つの焦點	11

大正十三年 (一九二四)

最も感謝した批評	14
默示のページ	15
自己紹介	17
人生觀	18

客觀描寫	19
嘘の原稿	20
大きな鬼門	23
松竹座を見る	25
肉感	27
自慢山ほど	29
汚ない家	31
文藝時代と誤解	33
十月の文壇	35
夢もろもろ	48
新しい馬鹿	52
新しい生活と文學と所有	54
文藝時評	56

大正十四年（一九二五）

イブセンの戯曲	58
模倣者の活動	59
編輯中記	63
食はされた生活	67
編輯中記	69
編輯中記	71
富ノ澤麟太郎の死	75
川端康成三十講	76
菊池寛と新感覺	77
大きな問題	79
莓——ほか初夏十七景——	80
ただ名稱のみについて	84

青年	85
肉體の感想	87

大正十五年・昭和元年（一九二六）

伊賀のこと	90
歌舞伎と新劇と人物	92
富ノ澤の死の真相	93
朝から晩まで	97
食事の時	100
二三のこと	100
坂の上の鳴海要吉氏	101
「月夜の喫煙」を読む	103

知人への不満	104
子供と大人	106
寝たらぬ日記	109
雑感	111

昭和二年（一九二七）

作品の深さ	113
雑感	114
孔雀	115
主観主義と菊池寛氏	116
六月一日	117
高田保を送る	119

屋上散歩と青年	119
日輪挿話	120
東京・アレグロ	122

昭和三年（一九二八）

偶感	124
空氣その他	125
感覺のある作家達	129
俳優の劇評	133
形式と思想	133

昭和四年（一九二九）

文藝時評……………137

始めの事について……………139

バレリー……………140

女性と認識と……………140

中本たか子氏について……………144

私の生活……………145

池谷信三郎氏……………146

昭和五年（一九三〇）

外國語……………147

どんな風に發展するか……………149

作者の言葉——『寢園』……………150

満蒙について……………151

昭和六年（一九三一）

モダン・反モダン……………153

心理主義文學と科學……………155

ネオ・バーバリズムとは……………157

昭和七年（一九三二）

當時……………	159
一つの感想……………	160
早春……………	162
小説と時間……………	166
夏にでもなれば……………	167
ジョイスの『若き日の藝術家の肖像』……………	168

昭和八年（一九三三）

文學への道……………	170
作者の言葉——『時計』……………	172

昭和九年（一九三四）

雜感——異變・文學と生命……………	173
宮澤賢治氏について……………	175
歴史小説と作家……………	176
作者の言葉——『盛装』……………	177
書きつつあるときだけ……………	178

昭和十年（一九三五）

雜感……………	179
---------	-----

行路難	182
作者の言葉——『家族會議』	185
現代の青年	185
紋章について	189

昭和十一年（一九三六）

覺書	190
新聞雜感	195
文藝雜感	198
自然解釋	201
覺書	202
覺書	205

旅中寸感	208
巴里通信	209
無題	210
近望の美エッフェル塔	211
當番記	212
歐洲から歸つて	214

昭和十二年（一九三七）

富ノ澤麟太郎	217
感想	220
芥川龍之介賞經緯	221
早春雜句	222

着物……………	223
最後の繪……………	224
巴里と東京……………	225
作者の言葉——『旅愁』……………	226
女の問題……………	227
猫……………	228
芥川龍之介賞經緯……………	228
上海の事……………	229
友田の青い鳥……………	231
昭和十三年（一九三八）……………	
覺書……………	233

芥川龍之介賞經緯……………	235
芥川龍之介賞經緯……………	236
日記……………	236
原作者の言葉……………	237
昭和十四年（一九三九）……………	
往信復信——三木清様……………	238
芥川龍之介賞經緯……………	239
芥川龍之介賞經緯……………	239
名月の夜に……………	240

昭和十五年（一九四〇）

寫眞について	242
芥川龍之介賞経緯	243
季節について	243
雑感	245
川端氏の藝術	248
穆時英氏の死	250
覺書	251
文學の再建	
——尾崎士郎君への返信——	255
作者の言葉——『鷄園』	256

昭和十六年（一九四一）

芥川龍之介賞経緯	257
春の瀬戸	258
小説中の批評	259
みそぎ祭	260

昭和十七年（一九四二）

芥川・直木賞選評——芥川賞	263
神々に祈る——檀原神宮に参拜して	264

昭和十八年（一九四三）

蒙疆文學賞・短篇小説——選評……………266

芥川賞選評……………269

大いなる一瞬……………270

アツツ島を憶ふ……………271

朝鮮のこと……………275

芥川賞詮衡感想……………277

わが郷土讃……………278

昭和十九年（一九四四）

今日の挨拶……………281

芥川賞選評……………283

パンと戦争……………284

芥川賞選評……………286

不急の願望を貫く……………286

昭和二十年（一九四五）

典型人の死……………288

芥川賞選評……………292

特攻隊……………293

昭和二十一年（一九四六）

春の日……………295

解説
編集ノト題 保昌正夫

443

紅い花……………297

桔梗君の相……………301

悪人の車——覺書——……………302

無題……………309

鹽……………310

*

新感覺派文學の研究……………312

新小説論……………380

文學の倫理……………427

散文の精神……………432

定本
横光利一全集
第十四卷

大正九年～大正十二年（一九二〇～一九二三）

印象

印象

文章世界——細田源吉氏の「喪心」を讀む。作者の冷靜な鋭い眼は、感傷性にも狂はず最後まで虚偽と闘ひ乍らなまじい理想との妥協を破壊し續けた。その結果として、此の主人公の喪心にまでいたる苦悶は、或る人にとつては反省心を呼び起こさし、或る人をしては侮蔑を、更にそれから變じて同情心を搖り動かさしめ、又、或る種の人には必然的な生きたるユーモアを感じせしめるので

あらう。私達は作者の意圖のその何れにあつたかを探らうとする時、多少の不満を感じるであらうが、併し、それは此の一篇の難點とはならぬ。それよりも私に難點と思はる可きは、喪心そのことである。何ぜなら、私には作者の彼をして喪心せしめた理由が分明しなかつた。描かれたるままに了解すれば、主人公が餘りに長い遺書を一氣に書き續けたがためとも思はれれば、又遺書に現れたるが如き苦悶の結果とも見られ、更に兩方の合致とも思はれる。もし作者にして、描かれたる喪心の不自然でない限り、それはどうでもかまはないではないかと反問するならば、ひたすらに英雄を翹望して三人の女性のそのいづれをも曾て一度も愛してみようと考へなかつた此の一個の男と云ふ肉體は、所詮、一個の肉體の外何物でもなく、従つて此の作に於て私達は解決の暗示を何處よ